

新刊紹介

岡部毅史『魏晋南北朝官人身分制研究』（汲古書院、二〇一七年）

小野 響

本書は、魏晋南北朝史を主たる研究対象として研究を展開させる岡部毅史氏（以下、著者）が、二〇一七年に出版した学術研究書である。まず、その構成と、それぞれの初出を示そう。

前言

序章 官人身分制と魏晋南北朝史研究―本書の課題―（新稿）

上編 魏晋南北朝における官人身分の成立と展開

第一章 官人身分の成立と展開―晋南朝期の免官を手がかりに―（『東方学』第一〇一輯、二〇〇一）

第二章 北朝における位階制度の形成―北魏の「階」の再検討から―（『集刊東洋学』第八三号、二〇〇〇）

第三章 魏晋南北朝における「階」と「資」―「品」との関係を中心に―（『古代文化』第五四卷第八号、二〇〇二）

第四章 北魏北齊「職人」考―位階制度研究の視点から―（『史学研究』第二五四号、二〇〇六）

下編 魏晋南北朝における官人身分制の諸相

第五章 南朝時代における將軍号の性格に関する一考察―唐代散官との関連から―（『集刊東洋学』第七九号、

一九九八

第六章 北魏前期の位階秩序について——爵と品の分析を中心に——（『東洋學報』第九四卷第一号、二〇一二）

第七章 北魏における官の清濁について（『大阪市立大学東洋史論叢』第一一号、二〇〇〇）

付論 書評 閻步克著『品位与職位 秦漢魏晉南北朝官階制度研究』（『東洋學報』第八八卷第一号、二〇〇六）

終章 魏晉南北朝期における官人身分制の確立とその意義（新稿）

前言及び序章において、本書の課題の提示と、学説史整理が行われる。本書の名前が示すとおり、魏晉南北朝時代の官人身分制の成立と展開、及びその歴史的意義の考察が本書のテーマである。ここで言う官人身分は、「国家より付与される位階・官職などを根拠として、官人としての俸禄や服色、及び罪を犯した際の実刑免除といった諸特権を享受することが可能となる身分」（i頁）であるとされる。この官人身分は、九品官制によって設定される官品ないし位階によって秩序だてられる。また、明確な律令制による規定を持つ唐代は、位階制度の重要な画期とされる。そうであれば、それに先立つ魏晉南北朝時代は、その形成過程としてきわめて重要な意義を持つ。ここで、著者が研究を展開する上で指摘するのは、唐代を位階制度の「結論」と位置づけることによって、却って魏晉南北朝史の独自性や、官人身分成立の歴史的意義が見失われる可能性である。そこで、著者は、魏晉南北朝時代の特性、特に社会における評価との関連性に留意して、研究を展開させる。

第一章は、官人としての身分に直接的に影響を与える、免官を手がかりに、官人身分の形成過程を明らかにする。後漢、晋の免官は、現実存在する官庁の職務からの解任を意味していた。一方の南朝では、免官の対象になるのは「居る所の官」であり、これは官人の身分を示す官職を指す。この変化は、免官そのものが、現任官を解任する

というものから、官人の地位降格をはかるものへと内容が変化したことによる。ここに官職の「職」の側面から、位階である「官」の側面へと比重がうつりつつあるこの時代の傾向が看取される。

第二章は、北魏の「階」の用例を分析し、北魏の「階」は、特定の官職に就く際に必要とされる資格であったことを明らかにした。人事基準としての「階」そのものは、西晋や南朝にも存在したが、北魏の「階」は、多様な昇進の際に用いることのできる、より普遍的な昇進の単位であった。この意味に於いて、唐代の「階」と、一定の共通性が存在する。但し、「階」がただちに官品を意味する唐代とは違って、北魏の「階」は、官品とは同一の基準ではなかった。

第三章は、官資と「階」の形成過程とその特質について、官品および郷品との関係を中心に考察している。「階」―「資」の序列は、官職就任のための資格を意味し、官僚としての身分を示す官品とは異なる基準であった。南朝では、「階」と官品は一致した官人身分の基準とはなりえなかったが、北朝では、「階」「資」という基準によって、本来は社会的秩序との関係を備えていた官品の身分の実質から枠組みに形骸化させた。

第四章は、北魏北齊時代の「職人」を手がかりとして、国家による官人身分把握の意図を考察した。北魏北齊の「職人」は、基本的に流内官を指し、北齊にいたると、百官と対置される平氏としての意味も加わった。かかる職人に兵士を含めたことは、北齊の官人身分の拡大と良賤制における「良」階層の秩序化、再編成を示している。

第五章は、従来、位階として機能していたとされる南北朝時代の將軍号が、梁の天監七年改革から陳の滅亡までの期間において、真に位階として機能していたのかを問い直している。その実態をみると、南朝における將軍号の散官的性格は、位階としてではなく、官職の名称が重視される点に求められる。特定の官名を重んじるという南朝社会独自の価値基準が、官僚制秩序に一体化されることによって、唐の散官制度が成立したのである。

第六章は、北魏孝文帝の官品制度の特質解明を目的とする。道武帝の代王即位から、孝文帝までのおよそ百年を北魏前期と位置づけ、この期間の爵制と官品の関係を検討している。ここで指摘されるのは、爵の等級の減少は、臣下と皇帝家の距離が近いという事実と、爵位と官品を合体させた官人身分の表示の存在である。しかし、將軍号や内朝官など、官品のみならず、特定の官職への就任そのものが一定の意味を持つようになり、官品の価値基準が相対化された結果、北魏前期の官人身分は、爵位と官品を中心としながらも、將軍号その他の官職を含めた多元的な基準によって表示されていた。

第七章は、魏晉南北朝時代において、国家の官品に基づく位階的秩序の貫徹を阻んだ存在とされる官の清濁を手がかりに、北魏律令の特質と当時の官制のあり方との関連を考察する。北魏律令の職令には、清官を基準とする官職の等級が、官品とは別に規定されていた。この清官の等級化・法制化は、孝文帝個人の志向によって南朝的なものが導入された結果であったため、彼以降の北魏で十分に機能したとはいえない。しかし、北朝において清官の一部が、位階としての散官に取り込まれていくことに鑑みれば、清官は、位階秩序の貫徹の阻害要因ではなく、位階としての官職を設定するうえで深く関与していたと推測される。

附論は、秦漢魏晉南北朝時代における位階制度を論じた、岡歩克『品位与職位 秦漢魏晉南北朝官階制度研究』（中華書局、二〇〇二年）の書評である。そして、終章において、本書の各章のまとめを行い（このまとめがあれば、筆者のまとめは不要であろうとすら思える）、以下の結論を導く。則ち、純然とはいえないまでも、官品とは本質的に官職の等級ではなく、魏晉南北朝時代を通じて社会における身分標識として性格と、官人の等級として認識されていた。位階の完成形対を「品階」とするならば、「品」という身分標識と、「階」という功績が一体化して成立するのが、唐代律令官制における位階制度であり、官人身分の表現形態の特質は、かかる二重性に存在するので

ある。

以上に、雑駁ながら、本書の内容をまとめた。ただただ、筆者のまとめが著者の意図と乖離していることを恐れる。もし、読者諸賢に筆者のまとめに理解しがたい点があれば、それは筆者の責任であり、ぜひとも本書そのものを、繙いていただきたい。

本書は、官人身分そのものの基準は数値―九品、十八班、九命―であることが原則であるが、その表現形態として官職の「名」が設定されていることは、貴族制も含めた魏晉南北朝時代の特有の理由が存在するはずであり、その説明なくして当該時代の位階制度の理解はあり得ない、とする、著者の問題設定に基づいて、魏晉南北朝時代における官人の身分が、様々な資格から考察することを通して、追求されている。著者の言う如く、かかる問題を解決すべく展開された本格的な研究は、本書が初めてであり、位階制度のみならず、当該時代の研究をする上で、必読の文献であることは疑いない。

（本学博士課程後期課程）